

# 高齢者の意志決定能力を支えるケア行動 —退院後の生活の場の決定に関して

高知県看護協会看護研究エキスパート育成研修 第1グループ  
看護部 志村 敦子 柴岡 三枝  
高知県立安芸病院 ○平瀬 節子 松下 智津  
高知県立芸陽病院 池上 早苗  
高知県農協総合病院 山本 幸美

キーワード：意志決定 高齢者 退院 家族 ケア行動

## I. はじめに

近年、医療を受ける人々は生命や人生に対する自己決定を行う重要性を強く意識するようになってきた。しかし我が国では意志決定能力があるとみなされた場合でも、家族の意向が優先される文化的・社会的背景があり、特に高齢者においてはその傾向がうかがえる<sup>1)</sup>。足立ら<sup>2)</sup>の考えを要約すると「意志決定能力のない患者の代行判断の場合でも、自己決定の主体はあくまでも患者自身である」と述べ、患者を擁護し意志決定を支えるという看護者の役割の重要性を強調している。先行研究によると、患者の自己決定の構造、自己決定のスタイル、自己決定を支える看護援助、看護者が捉えた患者の意志決定の構えが明らかになっている<sup>3)~6)</sup>。本研究は高齢者の意志決定能力を支える看護者のケア行動を明らかにすることを目的とした。

## II. 研究の枠組み

我々は、デシ<sup>7)</sup>の意志決定能力の捉えや、野嶋ら<sup>8)</sup>の自己決定の構成要素を基に質的研究を行い、抽出された結果をもとに、高齢者の意志決定能力を「自己の欲求を満たすために、状況を認識する力・目標を持つ力・選択する力・行動する力・対処する力・関係性を保つ力・取り組み続ける力・意志表示する力を活用する能力」と定義し、概念枠組みとした。

## III. 研究方法

1. 研究期間：H12年4月15日～11月15日
2. 対象者：高知県下の地域医療を担う5施設で、ADLに障害があり介護を必要とする70才以上の患者が、退院の場を決定するプロセスに関わったことのある経験5年以上の看護者6名。
3. データ収集：概念枠組みを基に作成したインタビューガイドを用い面接調査を実施し、逐語的に記述した。
4. データ分析：看護者の患者の意志決定能力を捉える視点、看護者の働きかけに注目し、帰納的分析を行った。
5. 倫理的配慮：研究への参加は任意でありどの段階でも取り消すことができることを知らせ、テープに録音することの了解を得た。データの取り扱いは慎重に行い個人を特定しないよう配慮した。

## IV. 結果

高齢者の退院後の生活の場の決定に関するケア行動を分析した結果、8つの高齢者の自己決定能力に対して、『強化・拡大する』『支える・方向付ける』『補う』のケア行動が抽出された。(表1)

### 1. 強化・拡大するケア行動

『強化・拡大する』は高齢者が持っている力を高齢者自身が伸ばすことができるように、看護者がケア行動を行うことである。例えば、状況を認識する力を強化・拡大するケア行動では、看護者は患者に外泊を勧め、自宅に帰ってからの日常生活を体験してもらうことにより、退院後の生活にどのような準

備が必要なのかを考える機会を提供していた。そして、患者が身体的な状況と具体的な目標を患者に伝え、そのためには今どのような訓練が必要なのかを説明し、訓練の必要性についての理解を促していた。そして看護者は、病室を移動し、患者が同室者と関る中で、「具合の悪いのは自分だけじゃない、自分だけがこんな思いをしているのではない」と、患者が病状を認識できるように、患者の身体的な状況を理解し助けていた。

表1 高齢者の意志決定能力に対するケア行動カテゴリー化

	強化・拡大	支える・方向付け	補う
状況を認識する力	体験させる 説明する 比較させる	力を尊重する	介護量軽減のための情報を提供する
目標を持つ力	短期目標を設定する力を育む	目標を尊重する	目標を調整する 段階的な目標の提示
選択する力	選択肢の幅を広げる	日常生活上の選択を大切に ADL拡大への行動を認める	サポートシステムの提示 補助できる環境の提供
行動する力	行動を具体化し実践させる 達成感を高め次に繋げる	積極的な行動を認める 話し合いの場の参加への方向け	
対処する力	不安、不満の傾聴		対処できる体制の提供
関係性を保つ力	自律心を促す	他者との関係を認める	
取り組み続ける力		積極的な行動を認める 本人の役割認識の尊重	
意志を伝える力	意向を引き出す 環境を変え言葉を引き出す	退院後の生活への意向の尊重 話し合いの場に参加できる方向づけ	

### 2. 支える・方向付けるケア行動

『支える・方向付ける』は高齢者が持っている力を認め、高齢者自身の思いや行動を尊重し、方向付けたり見守ったりすることである。例えば、行動する力を支える・方向付けるケア行動では、看護者は、「自分のパターンを掴んだら車椅子でトイレに行っていた」というように前向きの姿勢を認め支えていた。また、関係性を保つ力を支えるケア行動では、看護者は、周囲と協調しながらうまく生きていた人、介護者に感謝の意を表しているなど、周りの人達との付き合い方や関わりを大切にし、関係を維持していこうとしている患者の行動や思いを捉え認めていた。

### 3. 補うケア行動

『補う』は、看護者が意志決定能力を構成するそれぞれの力が大きく不足していると判断した高齢者に対して、その不足部分に必要なものを補うケア行動である。例えば、目標を持つ力を補うケア行動では、看護者は、自宅での生活を強く希望している患者に対し、現時点では自宅での生活が困難であることを判断し、まず施設で訓練を行いADL拡大することが自宅での生活につながるために必要であることを説明し、患者の目標を調整していた。さらに、在宅の為に排泄訓練が必要であると判断した看護者は「今のあなたにはこのような訓練が必要である」などと具体的に目標を示していた。また、選択する力を補うケア行動では、必要なサービスを選択できない患者に対して、適切なサポートシステムが活用できるように、施設との調整を行い患者の選択する力を補っていた。

## V. 考察

今回の研究結果より、高齢者が退院後の生活の場を決定する際の意志決定能力に対して、3つのケア行動が抽出された。そのなかで、対処する力、関係性を保つ力、取り組みつづける力に対して『強化・拡大する』や『補う』のケア行動が抽出されない部分があった。それは、語られた患者の殆どが在宅への移行が成功した例であり、意志決定能力があるとみなされた場合が比較的多く『補う』ケア行動が抽出されにくかったことが考えられる。しかし、今後の課題として考えてゆく必要もある。ここでは、高齢者の意志決定能力に対するケア行動の特徴、家族への支援について検討する。

### 1. 高齢者の意志決定能力に対するケア行動の特徴

『強化・拡大する』は、高齢者が持っている力を自分自身で伸ばすことができるような働きかけであり、看護者が最も能力を発揮していた。そして、一つのケア行動が同時にいろいろな力への働きかけに繋がっていた。

『支える・方向付ける』は、高齢者の持っている力を認め、高齢者の思いや行動を尊重することが、

肯定的なフィードバックという働きかけになり、それが高齢者の自尊心を高めることに繋がるのではないかと考える。鎌田ら<sup>9)</sup>は老年看護の原則の中で、「高齢者のもっている可能性を信じ、自立性を伸ばすことが高齢者の人間性を尊重することになる」と述べている。研究結果から『支える』というケア行動が抽出されたことは、看護者の高齢者を尊重するという姿勢がうかがえる。

『補う』は、意志決定能力が不足していると看護者が判断した高齢者に対して、必要な物を補うケア行動である。これは、早期から退院時の状況を予測したり、医療や生活情報から様々な状況をアセスメントし、住宅設備の調整や社会資源の活用調整をするなど、専門的な知識が必要となり看護者の力量が問われるところである。しかしこれらは看護者独自で行えるものではなく、他職種との連携が重要となる。看護者が自分の置かれている状況の中でどのような役割を果たすべきか常に自覚し専門性を磨いていく努力が必要であると考えられる。

## 2. 家族への支援

障害を持ち、サポートなしでは生活が困難となった高齢者は家族の中で役割を失うなど、人間関係も変わらざるを得ない状況がある。そして、高齢者の生活を支える家族へのケアも重要となってくる。在宅への移行において、家族が最も不安を感じているのは、留守中の発作や、転倒など突発的な事故である。障害を持った高齢者が状況の変化を感じたり緊急時に対処することは困難な場合が多い。しかし、高齢者の対処する力や、家族のサポート力を見極めるなど、対処する力に対するケア行動が重要である。三宅<sup>10)</sup>は「人生の最後を生きている人として認められ好ましい人間関係の状況にある老人は心身ともに安定した生活を送れるであろう」と述べており、関係性を保つ力を高め、高齢者が家族に認められながら生活を送ることも大切であるといえる。しかし、今までの生き様や培われてきた人間関係についてケア行動として取り組むことは、必要を感じながらも難しい場合がある。木下<sup>11)</sup>の考えを要約すると「ケア従事者が捉えた高齢者の人間関係のねじれは、本人が現実耐えている限りは触れるべきではない、しかしその状態に耐えられなくなった時や、高齢者自身がこの課題に取り組もうとする勇気が出た時は、関係の調整に積極的に乗り出すことがむしろ必要である」と述べており、関係性を保つ力を高めるケア行動は必要と考える。

野嶋<sup>12)</sup>は、看護者による家族への働きかけとして11項目を挙げ、家族に対する看護活動の方向性を述べている。今後は家族をとりまく地域環境や文化的な背景などを考慮し、家族の健康に対する価値観に対しても理解を深めながら、家族の力量をアセスメントしてゆくことが在宅へ向かう高齢者の看護に求められると考える。

## IV. まとめ

本研究から高齢者の意志決定能力に対する3つのケア行動が明らかとなった。それらは高齢者の持っている力を伸ばしたり、自尊心を高めたり、不足部分を補うのに役立っていた。今後は家族を含めたケアが重要となり、家族関係の調整や家族の力量をアセスメントするなど、家族を含めたケア技術の開発が重要となる。

## VI. 終わりに

今回の研究で高齢者の意志決定能力を支える看護者のケア行動が明らかとなった。しかし、本研究は対象者が少なく一般化に至らないこと、研究者間の見解が偏った可能性も否定できない。今後はさらに一般性があるか量的研究をすすめていく必要があると考える。

## 引用・参考文献

- 1) 宮脇美保子：患者の自己決定権と看護の役割，鳥取短大紀要第26号，35，1997.
- 2) 足立みゆき、宮脇美保子：自己決定権における倫理的問題の検討、鳥取短大紀要第28号，21 - 28，1998.
- 3) 野嶋佐由美、梶本市子、日野洋子他：血液透析患者の自己決定の構造，日本看護学雑誌 17，22 - 31，1996.

- 4) 梶本市子、日野洋子、松本幸子他：血液透析患者の自己決定スタイルに関する研究，看護研究 30 (2)，1997.
- 5) 阿部淳子、中野綾美、藤田佐和他：患者の意志決定を支える看護実践の特徴，日本看護科学学会 学術集会講演集，114 - 115，1998.
- 6) 藤田佐和、中野綾美、宮田留理他：看護者が捉えた患者の意志決定の構え，高知女子大学紀要，自然科学編 第 47 卷，1997.
- 7) Decj.EL. 石田梅男訳：自己決定の心理学，誠信書房，1985.
- 8) 3) 同掲
- 9) 鎌田ケイ子：高齢者ケア論，高齢者ケア出版 第 2 刷，36 - 45，2000.
- 10) 三宅貴夫：老いて病む人への看護，医学書院 第 2 版，12，1994 .
- 11) 木下康仁：老人ケアの人間学，医学書院 第 1 版 第 1 刷，135，1993.
- 12) 野嶋佐由美、西岡史子：インターナショナルナーシングレビュー，23 (2)，41 - 46，2000.

〔 平成 13 年 10 月 18～19 日，宜野湾市にて開催の第 32 回日本看護学会（老人看護）  
で発表 〕